■研究十二月往来〈164〉

「酒好坊」・「おさい」— 勧進狂言の番組から

稲田秀雄

昨年、関西大学図書館影印叢書第三巻（関屋俊彦氏解題）として刊行された『勧進能并狂言尽番組』は、近世大坂の勧進能及び勧進狂言番組の集成である。この中に含まれる鷺流の狂言尽くしの番組には、いくつかの稀曲が目につく。例えば宝永三年九月二十八日からの鷺仁右衛門（十三世定義）名義の勧進狂言（於大蓮寺前）には、「氏結」（三日目）、「おさい」「酒好坊」（四日目）、「歌仙」（五日目）のような曲が見えているが、このうちの「おさい」と「酒好坊」（演者は「おさい」が橋本久左衛門、「酒好坊」が岡村茂左衛門）は特に珍曲といえよう。『狂言辞典（事項編）』でも、「おさい」は内容不明とされており、「酒好坊」は記載がない。いずれも一般にはほとんど馴染みのない曲である。それだけに右の上演記録は貴重でもあり、内容の確認も兼ねて、この機会に管見を記しておくことにしたい。

まず「酒好坊」について。曲名は「しゅこうぼう」と読むか。この曲は、宝暦名女川本『萬聞書』所収「鷺大倉京流名替」によると「四国坊」「無言行」の別名をもち、「無言行」の曲名は『萬聞書』所収の「惣狂言目録」にもある。また、宝永頃の鳥取池田藩上演記録に見える「酒乞坊」がこれと同じ曲らしいことは、能楽資料集成7『鷺流狂言伝書宝暦名女川本　萬聞書』「解説」（永井猛氏）に指摘があるが、以下若干の補足を加えてみる。

「無言行」（＝「酒好坊」）は、鷺流伝右衛門派の江戸末期の台本である実践女子大学蔵の通称野中本に収められており、それによって内容が知られる。

讃岐坊（シテ）以下の四人の僧が無言の行を行なおうとするが、讃岐坊は自分はやめたいと言い、苦労なことをするより酒でも飲もうと誘う。他の三人は耳を貸さず無言の行を始めると、讃岐坊は一人だけ皆の前で酒を飲み出す。三人はそれを見てしきりに欲しがるが、ついに「ア、呑たい」と一人が口走り、他の僧も「夫レ物をいふた」と笑い出して、「いちどうにどつと、手を打わらつて、おん酒の昔と、成にけり」と、能「三笑」に基づく謡で留める。三人の僧が酒を飲みたがるところが見所らしいが、演出面では今一つ未整理な印象を受ける。無言の行をしている僧が結局全員しゃべってしまう話は『沙石集』巻四－一「無言上人事」に見える（元禄十一年版『露新軽口はなし』巻五－十二「むごんの事」は類話であるが、僧の話ではない）。狂言では、この笑話としても知られた無言の行の趣向に、僧の酒好きをからませているところが特色であろう。

「おさい」という曲は現存する鷺流台本には見えない。しかし、番外狂言を多く収める天理図書館蔵『狂言　大外』（大蔵八右衛門派の役者・堀村八二郎所蔵本の転写本）に書き留められていることが、橋本朝生氏「番外狂言覚書2－空腹・おさい－」（『能楽タイムズ』昭58・7）によって紹介され、従来知られなかった内容が判明した。すなわち、高師直（シテ）が菊亭殿のおさいという女をつれて、太郎冠者とともに伊勢へ下向する途中、瀬田の橋の上でその被衣を取ってみると、何と年寄った尼であった。怒る師直の前におさいが鬼女の姿で現れ、まことは竜宮の者と名乗り、水底に誘い入れようとする。それなら

竜宮の宝を見せよという師直に対し、おさいは俵藤太に全部宝を与えたのでもう何もないと、師直に空き俵をかぶせて引き込む、といった奇妙な内容である。

この曲は橋本氏も指摘されているように、寛永十三年、鷺権之丞他による上演記録（『江戸初期能組控』）があり、江戸初期から存在していたことがわかる。鳥取池田藩でも宝永～正徳年間に数回演じられており、この宝永三年の勧進狂言における上演もそれらの記録に付け加わるものである。

ところで、橋本氏は「おさい」の内容について、「なぜシテが高師直とされ、なぜ竜女が菊亭今出川家に仕えていたとされるのか、そして何よりも、曲名ともなった竜女の名「おさい」がどういう意味を持つのか」と疑問を持たれていた。このことにいささか補足を加えておくと、この風変わりな狂言は、『太平記』巻二十二「佐々木信胤成ル宮方ニ事」（慶長古活字本による。神田本・西源院本・玄玖本等の古態本では巻二十三「高土佐守被盗傾城（之）事」）に拠ったものらしい（この点、加美宏先生の御教示を得た。記して御礼申し上げる）。それは以下のような説話である。

菊亭殿の女房である御妻（おさい）に心を懸けた高土佐守師秋は、伊勢の守護として任地に下るに際し、御妻を同行することに決め、輿に迎えて瀬田の橋まで来る。折節、輿の御簾が風に吹き揚げられたのを見れば、

年ノ程八十許ナル古尼ノ、額ニハ皺ノミヨリテ、口ニハ歯一モナキガ、腰ニ重ニ曲テゾ乗タリケル。

という有様。師秋は驚いて、「是ハ何様古狸カ古狐カノ化タルニテゾ有ラン。鼻ヲフスベヨ。蟇目ニテ射テ見ヨ」と騒ぐ。実はこの尼は多年菊亭殿に出入りしていた者で、御妻の勧めにより輿に乗ったのである。出し抜かれたと知った師秋は、尼を打ち棄てて菊亭殿に押し寄せ、御妻を探すが見つからない。女の童を責め問うと、御妻は佐々木信胤のもとへ走ったと言う。師秋はいよいよ怒って、佐々木の宿所へ押し寄せんというのを、信胤は聞き、身を隠しかねて宮方に加わることになる。

師秋には別に本妻がいたのであり、これは二人妻説話の類型とも見られる（檜谷昭彦氏『未練の文字―二人妻伝承考』）が、むしろ身代わりという奇計をもって師秋を翻弄する御妻のしたたかさが強く印象付けられる。高師秋は『高階氏系図』等によると、師直とは従兄弟の関係になる。師直が塩治判官の妻に横恋慕する物語（『太平記』巻二十一「塩治判官讒死事」）と同じく、高一族の好色ぶりを示す説話であるともいえよう。

狂言「おさい」は、この『太平記』の師秋説話を基本的に踏まえながら、師秋をより著名な師直に替え（あるいは別伝の存在もありうるか）、既存の狂言「引括」等の趣向を加えて形成されたものと考えられる。瀬田の橋で尼と知れるのは『太平記』の通りだが、その後おさいが竜女としての姿を現すのは、狂言独自の奇抜な展開である。橋本氏も指摘されるように、ここには俵藤太説話の影響が認められよう。あえて付け加えれば、御伽草子『俵藤太物語』において、秀郷が瀬田の橋の上で大蛇（後に女房の姿となる）と出会う場面を踏まえている可能性があろう。

狂言と『太平記』との関連といえば、出家狂言「若市」のキリの謡に、阿間了願（巻二十六「住吉合戦事」に登場する法師武者）の名を引くことが想起されるが、それは修辞レヴェルのことである。素材面で『太平記』と関連する曲は、数ある狂言の中でも他に例を見ない。その点でも「おさい」は珍しい狂言であった。

（山口県立大学助教授）